

リカードオの國際均衡論

小島清

一 は し が き

リカードオの「外國貿易論」については、その「比較生産費例」のみが餘りにも有名であり、そのみが問題にされて他は省みられることが割合に少かつた。殊に彼は比較生産費によつて交易條件の定まる限界を明かにしたのみで、現實にそれが決定せられる要因を究明していない。すなわちリカードオには國際均衡論或は交易條件決定論はないのであつて、これをミルが「相互需要の法則」を樹立して補つたのであるといわれている。^{*}しかし果してそうであろうか。わたくしには、リカードオには確固たる「生産費原理」による自らの國際均衡論が形成されており、ミルはこれと全く異つた「需要原理」による部分均衡的國際均衡論を樹立したにすぎないと思われる。しかもミルの立場が國際貿易論の主流になつてしまい、ために國際貿易論を迷路に導いていると思われる。リカードオ自身の國際均衡論の追究ということが本稿の第一の課題である。

* G. Haberler, Theory of International Trade, London 1936, p. 145. 藤井茂氏「國際貿易論」五五頁、名和統一氏「國際價值論研究」二二五頁、などに見られる。

國際經濟理論においては、封鎖體制から最初に貿易が開始される場合の國際均衡の形成と、貿易收支の不均衡是正、資本移動・賠償金（或は貢納金）支拂・凶作の影響などによる國際均衡の調整乃至再均衡化過程とが全く別個に取扱われている。前者は所謂「國際價值論」として、後者は「トランスファー・メカニズム」として獨立に論ぜられている。しかも兩者においてそれぞれの先驅者の地位を違うように體系化づけており、その間に國際經濟理論體系の著しい混亂が見られる。例えば國際價值論においては、リカードオとミルとは同一視されているが、トランスファー論においては、ミルは古典的理論であり、リカードオは近代的理論の先驅者であると看做されている。そのような混亂があつてよいものであろうか。貿易開始ということも國民經濟にとつての「一回的變動」(a once-over change)であり、トランスファーも同じく一回的變動なのであり、そうである限り同一の靜態的國際均衡をもつて統一的に解明されえた筈である。^{*}リカードオにおいてはたしかにそうであつたと思われる。リカードオにおけるこのような國際價值論とトランスファー論とを通ずる統一的な國際均衡論の發見ということが本稿の第二の課題である。これが國際經濟理論の全體系の新しい編成への出發點を與えるであらう。

* R. F. Harrod, *Towards A Dynamic Economics*, London 1948, p. 5, pp. 7-8, 參照。

** リカードオ説は Senior, Shadwell, Sidgwick, Mangoldt, Hollander, Graham, ドイツ賠償金トランスファー論争及び「貨幣論」における Keynes 並に Harrod などに受繼がれていると思ふ。これとミルの需要説並に購買力移動説或は所得效果説とは區別されねばならない。拙著「外國貿易」第七章參照。

更に、我國で行われている「國際貿易における不等價交換」についての國際價值論争は、リカードオの國際均衡論

を誤解しているか、ミル的に歪曲しているか、その解釋が不充分であるか、或は國際均衡化過程を全然問わないでいるか、このいずれかのために著しい混亂に陥つていると思われる。この混亂に對して何らかの光を與えうるならばというのが、いま一つの本稿の副次的な目的である。

* リカアドオの國際均衡論乃至トランスファー論に關する研究は必ずしも少なくないであろう。そのうちで次のものはわたくしの解釋とは異なるが興味ある文獻である。朴克采氏「リカアドオの比較生産費について」(經濟論叢、三八の五)、増井光藏氏「國際支拂理論におけるリカアドオの立場」(國民經濟雜誌、六四の一・三)、櫛田民藏氏、全集第二卷「價值及貨幣」二三〇—七頁。またわたくしが最も多く示唆をえたのは次のものである。新庄博氏「リカアドに於ける『價值尺度』」(經濟學研究1)、喜多村浩氏「國際貿易理論の基本問題」、岩田俣氏「國際貿易理論序説」並に光に掲げたりカアドオ説の諸家のものである。紙數の制約によつて、一々引用することができなかつたことを、おわびしておかねばならない。

二 四 つの命題

リカアドオの『原理』第七章「外國貿易論」の構成を見るに、有名な比較生産費例だけでなく、次のような凡そ四つの命題が含まれており、それらが他の諸章及び他の著作と緊密な關連をもつてゐることがわかる。^{*}

* 特に關連のあるのは十九、二十、二十六、二十七、二十八の各章である。

第一命題——「外國貿易のいかなる擴張も、決して直ちに(immediately)一國における價値の總額(amount of value)を増加せしめないであろう。それは商品量と、従つて享樂額を増加するには非常に強力に貢獻するけれども」。

という句で始まるゴンナー版の第四十六節の命題である。この句の後半に力點をおけば「貿易利益」の本質を述べていることになるが、リカードのこの節における力點はむしろ句の前半の、一國の價值總額の増加を來さないことの證明におかれている。それは外國貿易の開始乃至擴張によつて一時的超過利潤は發生するが、資本家間の商業上の競争によつて、利潤率は以前と同じ水準に戻り、ために、資本總量と資本が活動化せしめる勞働の總量——價值の總額——とは不變であるとの證明である。そのような調整によつて、輸入品の相對價格——或は相對價值——が低下し、それを軸として一國全體の商品量と享樂額とが、即ち一國の富——價值でなく——が高まるということが併せて論及されているのである。

* David Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Gornier's ed, London 1913, p. 108. 小泉信三氏譯「經濟學及課税之原理」(岩波文庫)一一二頁。以下においては「原理」として引用し、括弧内に邦譯の頁を示すことにする。

第二命題——「一國において諸商品の相對價值 (relative value) を規制する同じ法則は、二國又はより多數の國の間に交換される諸商品の相對價值を規制するものではない。」「原理、一一三(一一八)」これがゴンナー版第四十七節の冒頭におかれており、この節にかの比較生産費例が掲げられている。この設例が、その後の學者によつて、貿易發生並にその利益證明の原理として利用されているのであるが、この節全體の構成から見ると、比較生産費例はむしろ國際價值法則が國內價值法則とは異なることの證明に用いられているとの觀が強い。すなわち設例の直前にある、「イギリスの羅紗と交換にポルトガルが與えようとする葡萄酒の量は、各商品の生産に投下さ

れた労働量によつては決定されない。」「原理、一一五（一一九）」といふことの證明に比較生産費例は利用されており、その結論は、「このようにしてイギリスは一〇〇人の労働の生産物を、（ポルトガルの）八〇人の生産物に對して與えるであろう。かかる交換は同一國內の個人間では行われぬ筈である。」「原理、一一五—六（一二〇）」國內と國際との價值法則の相違は右の點と、いま一つ、國內では利潤率均一であるが、國際間ではそうでないといふ點とである。

* リカード自身は“comparative advantage” (p. 248.) 或は“comparative facility of production” (p. 363) と
 いう表現を用いている。“comparative cost” なる表現に直したのはミルである。(J. S. Mill, Principles of Political
 Economy, Ashley's ed., 1923, p. 576.)

** それは比較生産費例の前に述べられている。「原理」一一四（一一九）。

ここで、第一命題が一國全體の總價値の問題であつたに對し、第二命題が諸商品の相對價値の問題であること、從つて國際價值論にはこの二つの問題のあることを、充分に注意せねばならない。われわれはそれぞれ「總價値の命題」並に「相對價値の命題」と區別しよう。相對價値とその變動の問題は、貿易に關する限り、貿易の個別的取引を支配する動機にかかわり、個別的現象であるに對し、總價値とその變動の問題は、國民經濟全體の利益・發展にかかわり、その調整のためには國民經濟全體の再編成を必要とするという總體的現象なのである。しかも個々の貿易取引は業者の利潤追及の個別活動によつて行われるが、その集計としての國際收支の調整は、必ず總體的調整を通過せねばならぬといふ二重性格を貿易現象はもつていたのである。この總體的現象を忘却した——少くとも明確に把えなかつた——ところに、ミルの相互需要説いな物々交換的貿易均衡論一般の根本的缺陷があるといえる。

第三命題——「金及び銀が流通の一般的媒介物に擇ばれているので、これらの金屬は商業上の競争によつて、かかる金屬が全く存在せずして諸國間の貿易が純然たる物々交換 (purely a trade of barter) であつた場合に行われる筈の自然的交易 (natural traffic) に適應するような割合において、世界各國の間に分配せられるものである。」

〔原理、一七(一一)、傍點は筆者〕

この句が「金の世界的配分」の命題といわれるものであるが、この句で始まるゴンナー版の第四十八節と、爲替相場變動と金移動との關係を明かにしている第四十九節、並に、或國の生産上の改善の貿易に及ぼす効果と國際收支調整とを説明している第五十節、この三つの節でリカードは貨幣經濟的均衡論を明示しているのである。第二命題の結論たるイギリス人一〇〇人とポルトガル人八〇人の生産物の交換という、國際收支均衡状態における交易條件の決定に至るまでの過程を、ここで貨幣經濟的に答えているのである。リカードは國際均衡論を究明しなかつたのではなく、それを物々交換的には展開しなかつたのである。彼は金が諸國に調和的に配分せられ貿易收支均衡に達した場合には物々交換的自然的交易になるけれども、均衡に達するまでの過程は物々交換的思惟では説明しえないとして、物々交換方式を積極的に排斥したのである。貨幣價値の變動は總體的調整の集約的表現であり、兩國の價値體系の連環である。貿易の二重性格からして、貨幣をぬきにしては國際均衡論は説明されえないからである。

第四命題——「貨幣の價値は、それが課税の相對的大小、製造上の熟練、氣候、自然生産物の優越、其他多くの原因に依存するから、いかなる二國においても決して同一ではない。」〔原理、一三四(一一八)〕

これは「世界の諸國における貨幣の比較的價値」(the comparative value of money in the different countries

of the world)〔原理、一二六(一三〇)其他〕という命題であつて、ゴンナー版の第五十一、二、三節にわたつて説かれてゐる。貨幣の價值とは何であるかが明かにされねばならぬが、それは後に検討するように、本位貨幣單位において表わされるところの貴金屬(金)の價值(必要労働量)、すなわち貨幣の固有價值(intrinsic value)である。リカードの結論は、外國貿易によつて、機械化其他による製造上の改善と同じように、貨幣の價值が、その國の人々にとつて相對的に、また外國に比し比較的に低廉になることであり、それは總價値の變化ではなく富の増加であるとするのである。この結論は第一命題と一致し、第一命題の具體的尺度が第四命題で與えられてゐるといえるのである。これらの四つの命題は相互に關連しており、統一的に把握されねばならないが、その理解の鍵が一に貨幣經濟的國際均衡論の正しい解釋にかかつてゐるのである。

三 個別的貿易取引

(一) 國際間の價值體系の連結環 國際均衡論を考察するにあつての第一の問題は、諸國の價值體系はそれぞれ獨立であるので、異なる價值體系の連結環を何に求めるかということである。完全自由競争を假定する國內においては、等質の労働は均一の賃銀を得るし、利潤率は均一化するから、相對價値の尺度即ち價値の連結環を投下労働量におくことができる。このように生産における基礎的均衡或は生産要素の段階において相對價値を關係づけるものを實質的連結環とよぼう。然るに國際間においては、労働も資本も移動し難く、國際的範圍にわたる生産上の完全競争は行われぬとする。そこに第二命題發生の根據がある。従つて國際間においては、直接に實質的連結環を得

ることができない。そこで國際間に移動する何らかの共通なもの——商品並に商品としての金——に連結環を見出さねばならない。金は輸送費の最も少い従つて國際的價格差の最小の商品であり、しかも金は貨幣としての役割を演ずる。そこで金を媒介として諸國の貨幣が連結される。それが爲替相場である。これを貨幣的連結環とよぼう。國際間ではこの貨幣的連結環を通じて間接的にのみ兩國の價值體系の實質的關係が見出されるのである。

そこで一體國際的連結環になる貨幣の價值、その比率たる爲替相場とは何であるか。先ずリカードは第二十七章で次のようにいつている。

「金銀は、他の一切の商品と同様に、それを生産するに必要な労働量、またそれを市場にもたらすに必要な労働量に比例してのみ價值を有する。金が銀よりも約十五倍高價であるのは、金に對してより大なる需要があるためでもなく、銀の供給量が金の供給量の十五倍であるためでもなく、一に金の一定量を生産するに要する労働量が十五倍であるからである。」〔原理、三四〇（三四六）〕

ここで、金も一の商品であつて、その價值は需要供給法則によつて左右されるのでなく、必要労働量に依存することが確言されているのである。ただ「生産するに必要な労働量」と「市場にもたらすに必要な労働量」との區別があるが、前者は金を國內で生産する直接生産の場合であり、後者は輸入によつて金を外國から獲得する間接生産の場合である。

このような金の價值が貨幣の固有價值である。勿論貨幣の購買力即ち一般物價水準は貨幣數量によつて、一時的人為的に變動する。しかし「一國において使用せられる貨幣の數量はその價值に依存せねばならない。」〔原理、三四〇

(三四六)「通貨は、それが全く紙幣でもつて成つてゐるが、通貨が代表すると稱する金と等しい價值をもつてゐる場合に、その最も完全な状態にある。」(原理、三四九(三五五)) すなわち貨幣の購買力は常に金の價值に引つけられ究極的には一致する。なぜそうなるかは、一は國內における「貨幣數量制限の原則」(原理、三四一(三四七))であり、他は金の國際的移動の自由(原理、三四五(三五一))なのであるが、それこそ國際均衡論によつて明かにされねばならないことがらである。

そして爲替相場は「一國の通貨の價值を他國の通貨ではかることによつて定められるものである。」(原理、一二八(一三二)) すなわち各國の本位貨幣單位に含まれてゐる金の數量(貨幣の固有價值)の比率が爲替相場である。従つて各國貨幣單位に含まれる一定量の金の獲得に必要な各國の労働量の比率が求められるが、それが、貨幣的連結環を介して間接に見出される諸國の價值體系の實質的關係に他ならない。

(二) 金を含む比較生産費と個別的貿易取引 かくて貨幣の價值と金の價值とはシノニムであり、しかも金は一つの商品であるから、リカードオでは明かに貨幣(金)を含む比較生産費表が考えられていた。そこで羅紗(c商品)、葡萄酒(w商品)とイギリス(E國)、ポルトガル(P國)とより成るリカードオの比較生産費例に、加うるに金(G)の一定量(xグラム)を獲得するに要する兩國の労働量を、E國では一〇〇人、P國では八〇人であるとすれば、第一表(三五頁)の如き金を含む比較生産費表が考えられる。

* リカードオの例ではE國のw商品の生産費は一二〇人とされているが、後の敘述との関連において一一〇人とした。こうしても比較生産費の本質は少しもそこなわれない。また金を含む比較生産費なる構想については H. v. Mangoldt, Grund-

リカードオの國際均衡論

riss der Volkswirtschaftslehre, Stuttgart, 1863. 新庄博氏「リカードに於ける『價值尺度』(經濟學研究1) など
参照。

ところでリカードにも物々交換的均衡論に利用しうるような句がある。

「すべての外國品の價值は、それと交換に與えられる我國の土地と労働による生産物の數量によつて測られる……」〔原理、一〇八(一二二)〕——引用(イ) 「もし貿易が純然たる物々交易であつたならば、貿易は、イギリスが一定量の労働によつて葡萄酒を得るのに、葡萄を栽培する(直接生産)よりも、羅紗を生産して(これと交換に)それを得ること(貿易による間接生産)の方が、より多くの量を得られる程に、羅紗を低廉につくりうる間に限り、又同じくポルトガルの産業には逆の結果が伴う限りにおいてのみ、續けられうるであらう。〔原理、一一八(一二二)、括弧内は筆者挿入〕

この二つの引用句は、輸出品と輸入品の關係を直接的に見、その交換比率(交易條件)を考える物々交換的均衡論に導き易い——ミルの相互需要説はそうである——のであるが、リカードではそうでない。「貿易上の取引はいずれも獨立の取引である」〔原理、一一九(一二三)〕ので、

「羅紗がポルトガルに輸入せられるのは、それが輸出國(イギリス)で値したよりも一層多くの金に對してポルトガルで賣れるのでなければ、ありえないことであり、葡萄酒がイギリスに輸入せられるのは、それがポルトガルで値していたよりも一層多くの金に對してイギリスで賣れるのでなければ、ありえない。〔原理、二一七—八(二二—二二)〕——引用(ロ)

輸出品と輸入品とは直接に關係づけられるのではなく金を媒介として間接的であり、一々の個別的取引は金ではかつた利潤が國內取引におけるよりも餘分に得られる限り行われる。そして個別的取引は、その集計として輸出額と輸入額とが均衡するか——その結果として金が移動して貨幣價值が變るといふ總體的調整が生ずるのであるが——どうか

第一表

	E 國	P 國
c	100 人	90 人
w	110 人	80 人
G	100 人	80 人

第二表

	E 國	P 國
c	£ ₁ 45	£ ₂ 50
w	£ ₁ 50	£ ₂ 45
G	£ ₁ 45	£ ₂ 45

第三表

	E 國	P 國
c	£ ₁ 45	£ ₂ 45
w	£ ₁ 45	£ ₂ 45
G	£ ₁ 45	£ ₂ 45

第四表

	E 國	P 國
c	100 人	80 人
w	100 人	80 人
G	100 人	80 人

第五表

	E 國	P 國
c	100 人	90 人
w	100 人	80 人
G	100 人	80 人

第六表

	E 國	P 國
c	£ ₁ 45	£ ₂ 50
w	£ ₁ 45	£ ₂ 45
G	£ ₁ 45	£ ₂ 45

第七表

	E 國	P 國
c	£ ₁ 46.5	£ ₂ 48.3
w	£ ₁ 46.5	£ ₂ 43.5
G	£ ₁ 46.5	£ ₂ 43.5

第八表

	E 國	P 國
c	£ ₁ 46.5	£ ₂ 46.5
w	£ ₁ 43.5	£ ₂ 43.5
G	£ ₁ 43.5	£ ₂ 43.5

第九表

	E 國	P 國
c	100 人	86 人
w	93 人	80 人
G	93 人	80 人

に拘らず實行されるのである。

引用(ロ)については、輸出・輸入が消費者の欲望とか需要に基いて行われる—ミル—のではなく、直接には一に貿易業者の利潤追及活動に支配されているとすることを十分に注意せねばならない。引用(ロ)で「輸入せられるのは」という表現を用いているが、決して輸入側から見ているのではない。こういう句もある。「(イギリスの業者が)イギリス品一〇〇〇磅の購入によつて(これを輸出し、その代償として)一定量の外國品を得ることができ、それをイギリス市場で一二〇〇磅に賣りうるならば、彼はその資本のこのような使用によつて二〇%の利潤を収めるであろう。」「原理、一〇八(一二二)」すなわち、貿易業に一定の資本を用いれば(いずれの國の資本が用いられるかは問われていない)、國內用はその資本を使用するのにくらべて、超過利潤があるから輸出されまた輸入されるということである。輸出とは業者が國內で商品を仕入れて外國へ賣ることであり、輸入とは外國で仕入れて國內へ賣ることであり、いずれも「供給者」としての業者の利潤計算によつて、貿易は支配されるのである。ここにリカードがミルの「需要説」と全く異なる「供給説」の立場にあることが明瞭に知られる。

	國	P	國
E	1.0	1.125	
c	1.1	1.0	
w	1.0	1.0	
G	1.0		

* 利潤計算の簡単な方法はこうである。「金ではかつて」見るのであるから、金の相對價值を兩國で一とおけば、第一表は上の如き絶對的金價格差表になる。これによつて、商品のEからPへの輸出は一・五%、^w商品の逆方向の輸出は一〇%の金ではかつて超過利潤の得られることが明瞭である。

かくて金を含む比較生産費表は、金の價值と貨幣の價值なる關係によつて、容易に價格表現に直されうる。リカードが自ら第二表の如き絶對價格の數字を擧げている(原理、一一八—九(一二三))。この絶對價格表は、イギリスの本位

貨(£₁)の價値は $x \frac{45}{45}$ グラムの金に相當し、それは $100 \frac{1}{45}$ 人の労働を必要とする。またポルトガルの本位貨(£₂)の價値はやはり $x \frac{45}{45}$ グラムの金に相當し、 $80 \frac{1}{45}$ 人 $\equiv 1.8$ 人の労働を必要とする、となすことによつて求められる。或はイギリスの賃銀率は $\$1.05$ 、ポルトガルの賃銀率は $\$0.55$ であるとする事によつて求められる。この場合兩國の本位貨は各々等量の金に相當するから、爲替相場は平價 $\$1 \equiv \1 である。そしてリカアドオは第二表について「葡萄酒は五磅の利潤をもつてポルトガルから輸出せられ、羅紗は同額の利潤をもつてイギリスから輸出せられるであろう。」「原理、一一九(一二三)」即ち雙方的貿易が行われ、金移動なくして貿易均衡に到達するであろうことを豫期している。

しかしリカアドオは右の第二表について國際均衡化過程を解明しているのではなく、E國で w 生産上の改善が行われ、その價値が四五磅に低下した前掲第六表の如き場合について、それを究明している。第六表は第五表の如き比較生産費を前と同じ賃銀率によつて絶對價格に表現したものに他ならない。そこで第六表の如くであれば、貿易上の取引はいずれも個別的取引であるので、E國からの e 輸出は超過利潤を收めうるから依然續けられるが、P國からの w 輸出はもはや行われない。すなわち片貿易になる。そこで爲替需給の不均衡が発生する。

「(ポルトガルの貿易業者の)ビジネスは、單にイギリスの羅紗を買い、その代金をポルトガル貨幣で買った(送金)爲替手形によつて支拂うことにすぎない。この貨幣がどうなるかは彼にとつては何らの重要性をもたない。彼はその債務を手形の(イギリスへの)送附によつて決済したのである。彼の取引は疑いもなく彼がこの手形を入手しうる條件によつて左右されるけれども、それらの條件は其時には彼に知られていることである。又手形の市場價格、即ち爲替相場に影響すべき諸原因は、彼の考慮外の

ことがらである。〔原理、一一九（一二三）〕

この句の意味するところは、爲替相場、従つて、兩國の貨幣價值比率がどうなるかは、個別的取引とは別の、總體的現象であつて、業者にとつては與えられたものであり、業者はそれをその時々との與件としてその下で利潤計算を行ひ、個別的取引をするということである。

もし雙方的貿易であり、爲替需給が平價の爲替相場の下で均衡するならば、金の移動を俟たずして相互の代金決済が行われるであろう。しかし右のようにポルトガルの輸入のみという片貿易になると、對英爲替相場に打歩プレミヤムがつく。即ち $£_1$ の爲替相場が騰貴する。この打歩が二%であるならば、四五磅のE國の商品がP國で五〇磅に賣れる限り、一%の利潤がある——差引純超過利潤は九%であるが——ので、商品のE國からP國への輸出はなお續けられ、 $£_1$ の爲替相場の騰貴は續き、遂にP國から金が流出するに至るであろう〔原理、一一九—二〇（二四—五）〕。

(三) 金移動の原因 金がなぜP國からE國へ移動するかの原因については、リカードをしていわしめれば、それも一に業者の個別的貿易取引動機、その利潤追及活動によるものであると答えるであろう。業者の個別的取引によつてP國の入超になると同時に、その決済のために爲替需給の不均衡が発生し、 $£_1$ の爲替相場が騰貴する。P國の業者にとつては、自國貨 $£_2$ で爲替手形を買つてこれをE國に送るも、 $£_2$ を金に兌換してもらつて金をE國に送るも全く無差別である。そこで $£_1$ の爲替相場が金輸送に要する費用のところまで騰貴するに至れば——金輸出點に達すれば——金を直接にE國に送つて代金を決済しようとする。そこに金流出が生ずるのである。

このことは、結局金は比較生産費構成におけるその相對價值に従つて、一つの商品として、他の商品と同じように

輸出或は輸入されることを意味するのである。即ち比較生産費構成が第五表のようであれば、P國においては金は w 商品と共に比較的優位商品であり、E國では金は w 商品と共に比較的劣位商品であるので、金がPよりEへ輸出される可能性をもっているのである。このようにあくまで比較生産費構成 \parallel 相対價値の比較比率を基礎として、業者の採算によつて、貿易の方向と貿易收支・金移動とがすべて同時にきまるとするのが、リカードオに一貫する生産費原則の體系である。

そこで金移動原因についてのマルサスとの論争中に表明せられたリカードオの有名な句に來る。

「もし我々が諸商品と交換に貨幣を支拂うことを肯ずるならば、それは必ずや、任意の選擇から行つたのであつて、強制的な必要から行つたものではない。我々が過剰なる通貨をもち、従つてそれを我々の輸出の一部とすることが適當だといふ場合でなければ、我々は輸出するより以上の商品を輸入しないであらう。鑄貨の輸出されるのは、それが低廉なるためであつて、不利な貿易差額の結果ではなくして、むしろその原因である。我々が鑄貨をより有利な市場に輸送しうる場合でなければ、または鑄貨よりもより有利に輸出しうるような商品がある場合には、我々は鑄貨を輸出しないであらう。*」

* David Ricardo, *The High Prices of Bullion*, London 1811, p. 268. 小畑茂夫氏譯「リカードオ貨幣銀行論集」四四—四五頁。

39

「貨幣の過剰」なる言葉が正しく解釋されないことのために多くの論争を惹起したのであるが、「(貨幣の)相対的過剰とは相対的低廉性*」という意味である。即ち兩國の相對價値の比較比率 \parallel 比較生産費において、第五表ならば、P國のGが相対的に低廉であり、従つて貨幣が相対的に過剰だといふのである。このように金を含んだ比較生産費に基いて解釋するの^{トリエール}でなければリカードオの眞意は到底理解することはできないのである。貢納金支拂の場合には、先

ず爲替手形に對する需要が増大するのであり、それ以後は以上と同様の経過を経るのである。また凶作の場合には、穀物の相對價値が騰貴し——生産の困難化、穀物單位當りの必要勞働量の増加に基く——、これは他の商品と共に貨幣が相對的に低廉になり——即ち比較生産費構成が變ることにより——、ために穀物輸入と貨幣の輸出とが同時的に發生するのである。先の引用において「鑄貨の輸出は、不利な貿易差額の結果ではなくして、むしろその原因である」というのは、論争のための誇張であつて、兩者は比較生産費構成及びその變動に基いて同時的にきまると解さるべきである。

* Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus, 1810—1823, Edited by James Bonar, 1887, No. 7. 中野正氏譯「リカードのマルサスへの手紙」上(岩波文庫)三三頁。

** Letters, *ibid.*, No. 10. 邦譯四四—四五頁。

*** Letters, *ibid.*, No. 7. 邦譯三三頁。

これに對しリカードの反對者ソントン並にマルサスは、「欲求または欲望」或は「需要」の變動によつて貿易不均衡が先ず發生し、この結果金移動が惹起されるのであり、また金を受取られるのは、商品に對する需要は限られてゐるけれども、金に對する需要は常に無限大であるからとなしてゐる。この立場がミルにうけつがれ、金の世界的配分も相互需要法則に従うのだと、リカードの説とは別のものをもつてきてゐるのである。金移動の原因論についても、このようにリカードの「供給説」とミルの「需要説」とでは明かな相違が見出される。われわれにとつて特に重要なことは、リカードにおいては金移動もまた業者の個別的利潤道及活動によつて惹起されるとなされていたことの

認識である。

* Thornton, An Enquiry into the Nature and Effects of the Paper Currency of Great Britain, 1802, in McCulloch's correction, 1857, pp. 220—221. 渡邊佐平・杉本俊朗氏譯「ソートン・紙券信用論」一四五—一六頁。Malthus, Publications on the Depreciation of Paper Currency, in Edinburgh Review, No. 34, Feb. 1811, pp. 340—346. 〃
れは前掲小畑氏「リカアドオ貨幣銀行論集」九二—三頁にある。

** J. S. Mill, Principles……, p. 626. 参照。

四 國民經濟の總體的調整

(四) 金移動の効果 金移動が生ずるといかなる効果が發生するか。金はたしかに一商品として移動せしめられるのであるが、移動した金は貨幣として機能する。そこに國民經濟の總體的調整が惹起されるのである。P國の貨幣の減少、E國の貨幣の増加を來すと、それは「一商品の價格のみに作用するのではなく、すべてのものの價格(貨銀にも)に作用するのであり、従つて、葡萄酒及び羅紗の價格はイギリスにおいては雙方共に騰貴し、ポルトガルにおいては雙方共に下落するであろう。羅紗の價格は一國(E國)では四五磅、他の國(P國)では五〇磅であつた(第六表参照)ものが、今やポルトガルでは四九もしくは四八磅に下落し、イギリスでは四六もしくは四七磅に騰貴するであろう。」「原理、一一〇(一二四—五)、括弧内は筆者挿入」

41 第六表の状態から右のような結果にはどうしてなつたのであろうか。リカアドオの右の數字にはほ近いように、羅

紗の價格がE國で四六・五磅に騰貴したのだとすれば、それは1.30(三・三三%)の騰貴である。またP國では同じく1.30だけ下落したとすれば四八・三磅である。このような價格變動は、商品に限られることなく、w商品並に金についても一律に起つた筈である。そこで第七表がえられる。

更に同一率の賃銀變動が起つた筈である。またそうでなければ一般物價變動はリカアドオ體系においては起りえない。勿論その間には、銀行信用機構、流動性(Liquidity)と利率の變動という如き複雑な機構が介在するであろう。その間の説明はリカアドオには缺けている。それをハロッドによつて補うならば、金流入國では流動性が高まり、利率が低下し、投資が刺戟される。それは勞働に對する需要を増加し、企業者間の勞働者獲得競争が賃銀を高める。金流出國ではその逆である。だから賃銀率變動は一般物價水準變動に時間的に先行するものとみなければならぬ。またそのように生産の基礎條件の變動を必然的な環とするところに「供給説」の特色がある。リカアドオとハロッドとの差は、前者は完全雇傭を假定するために賃銀率變動となるに對し、後者は不完全雇傭の場合には雇傭量(活動水準)の變動となる点にあるのみで、供給説的立場において共通である。ミルにおいてはこの重要な環が強く意識されていたかどうか疑問であり、むしろ、單純な貨幣的インフレーション説に立つていると思われる。

* 金移動が賃銀變動をもたらすことは、「原理」二二七(一三〇一一)其他各所に見出される。

** ハロッド「國際經濟學」邦譯一七〇一一、一七六頁參照。

かくて賃銀率はいまやE國では $\$1.0465$ (以前は $\$1.045$)に騰貴し、P國では $\$0.54$ (以前は $\$0.555$)に低

落したのである。ということは本位貨の勞働價值がいまや、 £_1 はイギリス人 $\frac{100}{46.5}$ 人（以前は 21.21 人）、 £_2 はポルトガル人 $\frac{80}{43.5}$ 人（以前は 1.84 人）に、それぞれ變動したということである。

さて第七表の如くであり、かつ金移動の結果爲替相場が平價に復したならば、絶對價格差に従つて、 e 商品はE國からP國へ輸出され、 w 商品は逆にP國からE國へ輸出されるといふ雙方的貿易が可能となり、貿易收支均衡に達するであろうことは明かであろう。またこの表から、もし爲替相場が平價に保たれているならば、 Q についても絶對價格差があるから金がP國から輸出されるのだということもわかる。しかし「かかる（E國の貨銀・物價の）騰貴は貴金屬の流入の曉においてのみ起りうる」（原理、一二七—一三二）といつてゐる如く、金移動は金の價格差を求めて積極的に行われるというよりは、貿易決濟のために爲替相場と金輸送點との關係から——前節に述べたように——貿易差額と同時に生ずるのであると解すべきであろう。

(五) 「商業上の競争」の機構　そこでどうなつたら貿易均衡に達し、金移動が止み、爲替相場が平價に復するのであろうか。それを擔うものがリカードでは各國內における「商業上の競争」(the competition of commerce)による國民經濟の總體的再編成の機構である。

第二、六、七表に示された價格は既に一般利潤を含んでゐる自然價格とみらるべきであり、ために貿易によつて超過利潤が発生した。貿易業に超過利潤があれば、「資本は當然この有利な産業に流入してき、葡萄酒(輸入品)の價格はすべてのものを元の水準に復せしめるまで低落するであろう。」「原理、一〇九(一一二)」と述べ、續いて貿易によつて一般利潤率は決して直接には高まるものでなく、元の水準に復することを詳論してゐる「原理、一〇九—一一二」

二一五)。だからこのような商業上の競争によつて、輸出品は結局輸出國の自然價格に落着くことになる。このことの一層端的な表明は次の句である。

「穀物は、他のすべての商品と同様に、いずれの國においてもその自然價格をもっている。即ちその生産に必要にして、それだけ支拂われなければ耕作されえないところの價格をもっている。市場價格を支配し、これを外國に輸出する便否を決定するのは、この價格である。穀物の輸入がイギリスで禁止されれば、その自然價格はイギリスでは一クオター六磅に騰貴するかもしれない（劣等地を耕作するを要するから）。フランスにおける價格は僅にその半分にすぎないが。もしこの時輸入禁止が除かれれば、イギリスにおける穀價は低落するが、それは（以前のイギリスとフランスの自然價格たる）六磅と三磅との中間の價格に下落するのではなく、結局永續的には、フランスの自然價格（三磅）、即ち穀物をイギリス市場に供給して、しかもフランスにおける資本の通常利潤をもたらさうような價格に、下落するであろう。たといイギリスが十萬クオターを消費しようと或は百萬クオターを消費しようと、穀物の價格はやはり自然價格に留まるであろう。イギリスの需要量が後者（百萬クオター）であつたならば、この多量の供給をなすためにフランスでは質の劣つた土地を耕さねばならぬために、その自然價格が恐らく騰貴するであろうし、それは勿論イギリスの穀價に影響するであろうが。要するに私が主張するところは、諸商品の輸入國において賣られる價格を究極的に支配するものは、それらの商品が獨占の目的物でない限り、輸出國における諸商品の自然價格であるということに盡きるのである。」（原理、三六三—四（三七五—六）、括弧内は筆者挿入）

ここでいわれていることは、自然價格は需要によつてではなく生産の難易の變化によるのでなければ變らないこと、自然價格によつて、即ち比較生産費上の地位によつて、輸出されるかどうかがきまること、並に商業上の競争によつて輸出品の價格、輸入國にとつての價格は輸出國の自然價格に落着くことである。輸入國にとつての價格は輸出國の自然價格プラス輸送費を爲替相場で換算したものに他ならない。右のことは穀物に限らず一切の商品、金についても

同様である。

そこで以上のことを第七表にあてはめてみれば、第七表が第八表の如く變化することである。但し運送費は無視することにする。即ちc商品は、P國（輸入國）ではE國（輸出國）の自然價格四六・五磅にまで低落し、w商品とGとは、E國（輸入國）ではP國（輸出國）の自然價格四三・五磅に各々低落したのである。こうなれば爲替相場は再び平價（ $\text{£}1 = \text{¥}1$ ）に復す*。

* 「製造工業に秀づる國（われわれの解説では生産改善を行つたE國）に、充分の量の貨幣が流入せられ、その穀物及び労働の價格を騰貴せしめる時のみ、（爲替相場は）平價にありうる。」〔原理、一二七（一三二）〕

金の移動が充分に行われるならばこうなるのであるが、「いやしくも貨幣の流動が強いて差止められて、貨幣がその正當の水準に落着くことを妨げられる場合には、爲替相場のありうべき變動には際限がないのである。」〔原理、一二七—一八（一三一—二）〕すなわちP國に爲替相場が著しく不利になる。いま $\text{£}1 = \text{¥}1.07$ になつたとすれば、第六表において、c商品は輸出國Eにおしては $\text{¥}1.45$ であるがP國にとつては $\text{¥}48.2$ （ $\text{£}1.07 \times 45$ ）に相當し、P國の $\text{¥}50$ より低廉であるので輸入され、結局 $\text{¥}48.2$ に落着く。w商品は輸出國Pでは $\text{¥}45$ であるがE國にとつては $\text{¥}42.1$ （ $\text{£}1.107 \times 45$ ）に相當し、E國の $\text{¥}45$ より低廉であるので輸入され、結局 $\text{¥}42.1$ に落着く。即ち爲替相場調整の場合には、第六表は次の第十表の如き状態で、爲替相場 $\text{£}1 = \text{¥}1.07$ において均衡に達するのである。この爲替相場で換算すればGについても絶対價格差が発生しているから當然金移動が刺戟されるのであるが、それが禁止されているのである。この爲替相場は金移動のあつた場合の第七表のGの價格比率 $\text{¥}1.465 : \text{¥}1.435$

の逆數に他ならない。だから(1)金移動の場合にはそれによつて國內で賃銀と物價の變動(インフレーション・デフレ

第十表		P 國	
E 國	£ ₁ 45	£ ₂ 48.2	
	£ ₁ 42.1	£ ₂ 45	
	£ ₁ 45	£ ₂ 45	

ーション)を來して、それによつて總體的調整が行われるが、(2)爲替相場調整の場合には輸入品の相對價格低下は別として、賃銀・物價の國內的變動は起されずして、それが對外的のみに變動せしめられるのである。これらは國內均衡と國際均衡の調整の二方策に他ならず、また(1)について金移動なくしても金融政策其他によりインフレ・デフレの國內的調整を行えばよいこともわかるであろう。

右の二つの調整のいずれにしても、實質的連結環で見れば第九表の如くなることに歸する。

即ち第八表を金移動後の賃銀(E國 £₁ 0.465 D 國 £₂ 0.54) P 國第十表を從來の賃銀(E國 £₁ 0.45 D 國 £₂ 0.55)で割ると、第九表になるのである。だから均衡は結局第五表の如き比較生産費から第九表の如き共通生産費比率に到達することによつて、言い換えれば第六表の如き絕對價格差から、第八表及び第十表の如き、爲替相場で換算して、絕對價格が均一になる状態に達することによつて、達成せられるのである。この間に實現される輸出額と輸入額とが均衡であれば、もはや金移動も爲替相場變動も生じない。従つてより正確には貿易收支が均衡であるという状態において、共通生産費比率になることが、眞の國際均衡であり、そこに定まる爲替相場が均衡爲替相場である。但し貢納金・賠償金支拂とか資本輸出などの一方的價值移轉の場合には、それを實現するに足る貿易收支状態における生産費比率の共通化が、その國際均衡である。だから生産費比率の共通化が限界的比率の間のどこに具體的に定まるかは、リカードオでは、超過利潤がなくなるまでの間に實現される兩國の輸出供給量に依存することになる。勿論そこに各

各相手國の輸入需要量及びその變化が影響をもつであろう。しかしリカードにおいては需要はその時々と與えられたものであつて、相對價格に相對價值はこの需要をみたすに必要な生産費（勞働價值）によつて——獨占の目的物でない限り——必ずきまるとするのである。だから相手國の輸入需要が大ならば、超過利潤のなくなるまでに實現される輸出供給量が大になるだけであつて、貿易均衡の條件としては生産費比率の共通化ということが必ずみだされねばならない。その際生産自體が可變費用で擴張・縮小されるならば——事實リカードにおいても穀物生産については明かに遞増費用法則が支配するとされている——その事自體が生産費比率共通化のいま一つの力となる。しかしそれはリカードの「商業上の競争」という言葉の中に當然含まれていることがらである。

* 第九表によつて、輸入品の價值は輸出品の數量によつて測られるとの「引用（イ）」（三四頁）が證明される。第九表においてE國が100人の生産物たるe一單位を輸出すると、 $1 \cdot 07 \left(\frac{85}{80} \right)$ 單位の商品或は金を輸入しうから、輸入品w及び金の價值は $100人 \times \frac{1}{1.07} = 93人$ である。同様にP國では80人の生産物たるw或はGの一單位を輸出すると、商品の $0 \cdot 93 \left(\frac{93}{100} \right)$ 單位を輸入しうから、輸入品eの價值は $80人 \times \frac{1}{0.93} = 86人$ になるのである。

** そこにハロッドによる遞増費用の場合の生産費比率共通化の分析並に輸出供給弾力性の大小の吟味などが、リカードの理論の發展として連なるのである。R. F. Harrod, International Economics, 1939. 藤井茂氏譯「ハロッド國際經濟學」第二、三章。

ミルの「相互需要（或は國際需要）均等の法則」は一國の輸出額と輸入額、或は一國の輸入額と相手國の輸入額（逆に見れば輸出額と輸出額）とが均等にならねばならぬという意味で提唱されたのであるならば、自明の理にすぎず、國際均衡化が需要側の變動（價格效果的にしる所得效果的にしる）によると主張するのであれば、リカードと

全く異なるものであり、價值と價格の必然的乖離が発生するのである。

五 國際均衡化の基本的要因

以上に述べたところが、「諸國間の貿易が純然たる物々交換であつた場合に行われる筈の自然的交易」に到達するまでの國際均衡化機構なのである。即ちリカードオの第三命題の内容なのである。そこで以上の過程を整理してみればこうである。

(1) 利潤追及を動機とする企業家の個別的貿易取引が、すべて比較生産費構成を基礎にして行われ、貿易の方向をきめると共に爲替相場變動と金移動をも發生せしめる。(2) 金移動の結果貨銀と物價が國內的に變るか、或は爲替相場變動によつてそれが對外的に變るか、いずれにしても價值體系の貨幣的連結環の總體的調整が生ずる。それは結局價值體系の實質的連結環の變動に他ならない。(3) 利潤率均一化の商業上の競争によつて、輸入品は輸出國の自然價格に落着き、従つて輸入國でその相對價值が低下する。

この(2)は國際均衡確保のための總體的調整であり、(3)は國內均衡再形成のための調整であるといえる。この(2)と(3)の調整は、現實には、試行誤謬的に數段階繰返し行われて、内外の兩均衡を達成するのである。即ち、若干の爲替相場變動・金移動に伴つて直ちに(3)の調整が行われ、それだけでなお國際均衡が達成されなければ、更に爲替相場變動・金移動が行われ、再び(3)の調整が行われるというように。

(2)の調整は、金の各國にとつての勞働價值、各國の金獲得能率或は金(貨幣)の各國人にとつての低廉性が變ると

いうことである。それは賃銀が變るか、爲替相場が變るかして、各國人の國際的能率報酬率が變るのでなければありえない。それはまた實質的連結環でいえば、生産要素交易條件の變化ということである。これが國際均衡化の基本的要因である。われわれの例では賃銀がE國で騰貴しP國で下落したこと、或は爲替相場がE國に有利化しP國に不利化したこと、結局は第五表のGで測られるE國一〇〇人對P國八〇人から第九表の九三人對八〇人への生産要素交易條件の變化に他ならない。これらの變化率はすべて同一である。

従つてリカードが所謂貨幣數量説をとつていたとはいえない。彼は貨幣の價值が、自然價格と市場價格の關係の如く、數量によつて一時的に固有價值から乖離すること——殊に紙幣制において——は認めるが、永續的には金の價值、金獲得能率に依存するとの生産費原則に立つている。勞働費用では不變であつても、賃銀が國內的にか對外的にか變えられることによつて、可變貨幣生産費になるのである、そこに國際均衡化の可能性が生み出される。

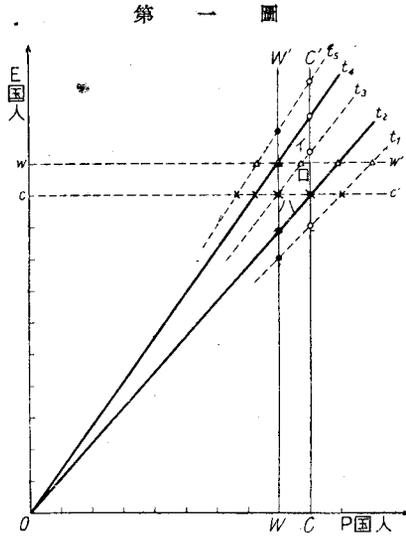
また貨幣的連結環は實質的連結環を見出す媒體にすぎないから、必ずしも金である必要はない。即ち兩國で均一の價格をもつ商品であればよい。そこでリカードも何らかの「標準共通物」(some standard common)であつてよいとしている〔原理、一二八—九(一三三)〕。この中間的連結環が金でなければならぬか他の一定の商品であるかは、恰も貨幣として金が用いられるかどうかの問題と同じように、むしろ便宜的なことがらである。金に限らずいかなる商品においても(運送費の大小の差はあるが)均一の生産要素交易條件の見出せることが、國內的完全競争の實現されていることの表明に他ならない。またこのように金は實質的連結環でみて均衡が實現するまで移動するのであるから、調整後還流するとはリカードでは考えられていなかった。

(3)の調整は、輸入品の各國での相對價值が、他の商品に對して低落するという個々の商品間の關係の變化であり、價格比率・商品交易條件の變化を來す。第五表と第九表とを比較すれば明瞭である。同時に輸入品は金（貨幣）に對しても相對價值が低下したのであり、また金が輸入される國では、金自體が他の商品に對して低廉になつたのである。かかる相對價值變動が國際均衡化の第二の基本的要因であるが、これは商業上の競争によつて實現される。

ここで貨幣（金）の價值に二つの比較の側面があり、その變動にも二面があることは明別されねばならない。右の(2)の調整によるものが國際間の「貨幣の比較的價值」といわれているものであり、(1)及び(3)の調整を惹起すものが、貨幣の「相對的過剩」とか「相對的低廉」とかいわれるものである。金の流入國では二つの意味で貨幣は低廉になる。即ち國際的に他國に較べると、國內的に他の商品に較べると。

このように資本主義の本質である企業家の利潤追及活動という「商業上の競争」原理によつて統一的に把握していること、従つてそれはあくまでも「生産費原理」に基礎をおくものであることに、リカードオ「國際均衡論」の特色が見出される。故に彼の説は、他説とのニュアンスを明示するには、「供給説」或は一層端的に「貨銀變動説」とよぶことができるであろう。

リカードオの國際均衡論の中核を以上のように明確に把握することができるならば、われわれはそれを簡単な圖表によつて示すことができる。これを生産改善のなかつた第一表から始まる過程についてみよう。輸入品の相對價格（＝相對價值）の低下という商業上の競争機構を入れれば、第二表が第三・四表の如くなることは、前の解明と全く同一である。この第四表の均衡状態が一イギリス人一〇〇人の勞働の生産物とポルトガル人八〇人の勞働の生産物と



第一圖

の交換(命題二)なのである。それは單にE國の c (一〇〇人)とP國の w (八〇人)との輸出入品の交換關係のみならず、 $c \cdot w$ 及び Q など國際的に交換されるすべての商品及び金についての労働の交換比率にひとしく見出される。こうなるのが内外の兩均衡を満足せしめる状態なのであり、そうでなければどこかに超過利潤が発生するのである。ところで貿易開始前に兩國で獨立にきまつていた金の比較的價値の比較生産費構成における地位が、第一表のようにE國一〇〇人對P國八〇人でなかつたならば、即ち c 商品における兩國の價値比率 $100Y : 80Y \parallel 1 : 0.8$ と、 w 商品における比率 $110Y : 80Y \parallel 1 : 0.73$ との間でなかつたならば、生産改善という擾亂が生じた時と同じように、調整が必然的に起されたであろう。第三・四表はそのような調整を経た後の均衡状態なのである。

そこで第一圖を見られたい。この圖は横軸にP國人、縦軸にE國人がとられている。P國の商品の生産費は OC (九〇人)並に OW (八〇人)であり、E國のそれは Oc (一〇〇人)並に ow (一〇人)である。次に兩國の金獲得能率の比率即ち生産要素交易條件を Ot_1 (E國八〇人對P國八〇人)、 Ot_2 (八九人對八〇人)、 Ot_3 (一〇〇人對八〇人)、 Ot_4 (一一〇人對八〇人)、 Ot_5 (一二〇人對八〇人)などとする。従つて兩國の生産費線と生産要素交易

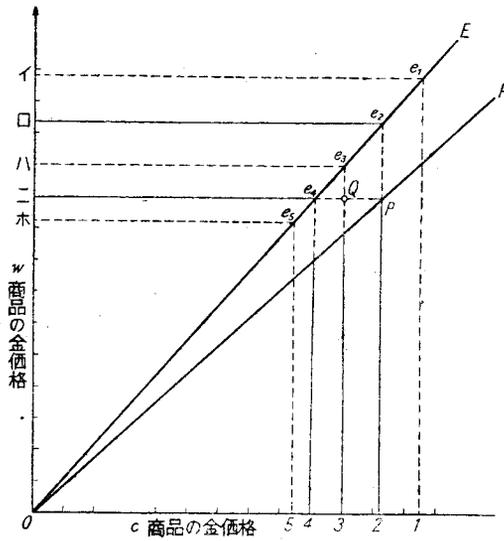
條件線との交點は、それぞれの軸からはかつて、兩國品の各國にとつての金價格を示す。即ち \times はE國 e 商品、 \circ はP國 e 商品、 Δ はE國 w 商品、 \bullet はP國 w 商品の金價格である。

そこで(a)生産要素交易條件が t_1 であつたならば、 e ・ w 兩商品ともにP國の方が各國にとつて金價格で廉いので一方的貿易になり、金はE國から流出して、 t_2 に變る。また t_3 の如くであれば、兩商品ともにE國の方が金價格で廉いのでやはり一方的貿易になり、金はP國から流出して、 t_4 に變る。 t_2 は生産要素交易條件が e 商品の兩國の生産費比率と等しい限界的ケースで、 e 商品は兩國で同一金價格になり貿易せられず、 w 商品のみがP國から一方的に輸出され、代りに金がE國から流出し、 t_3 に變る。 t_4 は他の限界的ケースで、 w 商品の金價格が一致して貿易せられず、 e 商品のみがE國からの輸出という片貿易になり、金がP國から流出して、 t_2 に變る。(c)結局生産要素交易條件は t_3 の如く二つの限界的比率の中間に落着く。ここではE國 e 商品の金價格(Δ)はP國のそれ(\circ)より低廉(いずれの國から見ても)だから輸出され、P國 w 商品の金價格(\bullet)はE國のそれ(Δ)より低廉であるから輸出され、双方向的貿易が可能になる。この(\circ)と(Δ)、(Δ)と(\bullet)の差額が正に金ではかつた超過利潤である。商業上の競争によつて、P國 e の金價格(\circ)が(Δ)に低落し、またE國 w のそれ(Δ)が(\bullet)に低落し、國際的均一價格になり、超過利潤は消滅するのである。

* これは現在の「國際收支の根本的不均衡」の原因である。リカードもその場合には金移動は避けえられぬと述べている。「原理」一二三(一二七)。

** リカードも多數商品になれば、金移動と貨幣價值の大なる變動は阻止されるといつている。「原理」一二三(一二六)。

第二圖



同様のことは他の方法でも圖示することができる。第二圖は横軸に c 商品の金価格を、縦軸に w 商品の金価格をとる。E 國では c と w の相對價值並に相對價格の比率は常に 100 對 110 であるから OE 直線がえられ、P 國では常に

90 對 80 であるから OP 直線が求められる。OE、OP が二商品についての比較生産費である。商品に對する金の相對價值を P 國では 80 人というように固定しておけば P 國については圖の p 點がこの國の金價格を示す。E 國のそれは金移動につれ變るから、 80 人、 89 人、 100 人……とすれば、それが e_1, e_2, \dots, e_5 への變化として示される。即ち e_1 は金の相對價值 80 人の場合、 e_2 はそれが 89 人の場合等々における E 國の $w \cdot c$ 商品の金價格である。

そこで (a) e_1 ならば p とくらべ兩商品とも E 國で高く、 e_5 ならば兩商品とも E 國で低いことがわかる。(b) e_2 ならば c 商品は兩國で價格均等であり、 w 商品のみ E 國で高く、 e_4 ならば w 商品は價格均等であり、 c 商品のみ E 國で低い。

(c) e_3 ならば c 商品は E 國で、 w 商品は P 國で安い。従つて e_1 から始まれば E 國からの金の流出があつて $e_2 \cdot e_3$ へ達し、逆に e_5 から始まれば P 國から金の流出があつて $e_4 \cdot e_3$ に達する。 e_3 において双方向的貿易が行われる。圖の e_3 と Q 、 P

と Q との距離はそれぞれ超過利潤を意味し、それがなくなるように、 Q 點で商品交易條件がきまるのである。

二つの圖示方法を比較するに、第一に、第一圖は生産要素交易條件の變化を、第二圖は商品交易條件の變化を明瞭に示す。第二に、第一圖は二國多數商品の場合に、第二圖は二商品多數國の場合に利用しうる、という各々特色をもつてゐる。ミル \parallel マーシャル的相互需要説は第二圖と同じような圖を用いて Q 點に商品交易條件がきまることを需要側から説明するのであるが、リカードオにおいては同じような圖を用いても、 e_1 から $e_2 \cdot e_3$ への生産要素交易條件の變化、即ち總體的調整によつて説明するものであることを注意せねばならない。

六 外國貿易の利益

以上の如きリカードオ國際均衡論の理解は彼の他の三つの命題の解釋に對して新しい光を投げかけるであらう。三つの命題を外國貿易の利益という觀點から反省してみよう。リカードオ自ら第一命題で「直ちには」と斷つてゐる如く、彼は貿易の「直接的・靜態的利益(效果)」と「間接的・動態的利益(效果)」とを區別してゐたと思われる。

先ず直接的・靜態的效果としての第一命題は、われわれの國際均衡論解釋から見れば、當然であると思われる。けれど、(1)投下勞働(價值)は輸出品生産に用いられる(この價值額を E としよう)。(2)それによつて得られる輸入品は、相對價值は低下するが數量が増加するから、兩者の積たる輸入品の總價值(これを M とする)は、依然として同じである。(3)一方に、 $E \parallel M$ という國際均衡が達成される。他方に、輸入品と競争する産業並に他の國內産業から有利な輸出産業への生産轉換が摩擦なく行われ——完全雇傭の假定——、且つ以前と同一水準の平均利潤率に落着く

という國內均衡が達成される。そうであるならば、一國の總價值は何ら變化を見ない筈である。従つて貿易の靜態的利益は、先ず輸入品の相對價值の低下、その數量の増加になり、これが複雑な分配關係を通じて、一國のえられる商品量と享樂額の一般的増加、即ち實質所得の向上をもたらすのである。

同じくわれわれの國際均衡論解釋、特に右の(1)(2)に述べた如き考方から見れば、「國內價值法則と國際價值法則とは異なる」との第二命題は、商品の直接生産と間接生産との相違にすぎないといえよう。即ち輸入品の價值は國內でのその商品の直接的投下労働量によつてはきまらないという相違であつて、等しく利潤率均一化の法則に支配されることには相違はない。ミルのように生産費原理を放棄し需要供給原理に至るとき、常に價格の價值からの乖離が當然に發生するのであるが、リカードにおいては、この乖離は決して生じないのである。

かくて貿易によつて各國にとつてはそれぞれ實質所得の向上がもたらされるのであるが、生産要素交易條件或は國際的金獲得能率差に従つて、國際間の貨幣所得水準の相違は當然に發生する。これが國際間の「貨幣の比較的價值」なる第四命題である。そこでリカードは一國の他國に比しての金獲得能率が高く、貨幣の價值が低廉であることが「富國」たるしるのである。金生産國からの距離、金の輸送費の差もあるが、輸出産業において生産能率の高い國では貨幣の價值が他の國にくらべ比較的に低廉であり、賃銀が高い。そうなることが能率に應じた諸國の労働の實質報酬 (real rewards of the labourer) の均一とすることである。但し製造工業國では賃銀が高いので國內品は割高になり、運送費のかさむ商品も割高になることも附言されている(以上、原理、一三三(二七))。従つて國際間の實質所得水準差は貨幣所得水準差程には大ではないであろうというのである。かかる國際的貨幣所得水準差の存在を、國際

間の不等價交換といつてもかまわない。しかし、リカードは國際間の競争は勞資不移動による不完全競争であり、兩國の價値體系は各々獨立であるから、普遍的勞働價値を指定して諸國の價値の絶對的比較を行うことはできないとしたのであろう。そして彼は「貨幣の價値」「富」の國際的比較及びその變動の問題に轉換しているのである。

貿易の間接的・動態的效果については多くの問題が残されている。リカードもここでは貿易が平均利潤率並に總資本と總價値を高めることも考慮している。ただ彼はそれを貿易のみの效果とするよりは、國民經濟發展の一般的問題とみたのであろう。彼において考えられている動態的效果は次の點である。(1)貿易により商品の低廉化、消費支出の節約を來し、勞賃基金が増大する〔原理、一一一(一一五—六)〕という一般的效果がある。(2)輸入品の種類によつて、食糧と必需品ならば賃銀の相對的低落、一般利潤率の騰貴を來す。富者の消費品ならば利潤率を高めない〔原理、一一一(一一六—七)、一二四(一二八)〕。輸入原料低廉化による資本構成(技術係數)變化という間接的效果には論及されていない。彼は輸入原料低廉化が製品價格の低落を來すから一般利潤率は變らないというところまでしか考えていない。(3)地代が減少して利潤と勞賃基金が増大するという所得の國內的分配の變動を來す〔原理、二五六(二六六)〕。右の(2)(3)の問題は農業國の立場からは不利な效果になるのであり、そこに保護貿易の問題が発生するのであろう。

本稿はリカードの國際均衡論を素直に解釋し直してみたまでである。彼の全理論體系の背後にある「セイの法則」とか、賃銀と利潤率の決定に潜在している需要供給法則とか従つて完全雇傭の假定とかが問われねばならぬ。そして生産費原理のみで割切つている彼の國際均衡論に、いかに需要側の要因を導入すべきであるかが考究されねばならぬ。しかしそれはミルの如き生産費原理の忘却であつてはならない。ここに國際經濟理論の新なる體系化の課題がある。